

善名称院蔵・奈良絵巻断簡等貼り交ぜ

屏風の全体像と奈良絵巻断簡数葉

—— 善名称院蔵・奈良絵巻断簡等貼り交ぜ屏風の紹介(一) ——

徳 竹 由 明

一、はじめに

和歌山県伊都郡九度山町の真言宗伽羅陀山・善名称院（別称「真田庵」⁽¹⁾）の宝物資料館には、奈良絵巻断簡を中心に、経典断簡・和歌色紙・和漢朗詠集色紙・和歌短冊・和歌扇面・歌集断簡等を貼り交ぜた紙本金地・六曲一双の貼り交ぜ屏風が存する。前稿では、貼り付けられた奈良絵巻断簡のうち、朝夷名三郎義秀に纏わる物語のもの、及びその可能性のあるものを紹介した。⁽²⁾そこで本稿では、奈良絵巻断簡等貼り交ぜ屏風の全体像、作品名

未詳の残りの奈良絵巻断簡の紹介等を行いたい。

二、善名称院蔵貼り混ぜ屏風について

それではまず、貼り混ぜ屏風全体を紹介する。

形態・六曲一双。紙本金地に經典断簡・漢詩色紙・和歌色紙・和漢朗詠集色紙・漢詩短冊・和歌短冊・和歌

扇面・歌集断簡・奈良絵巻断簡を貼り混ぜたもの。

制作年代・不明（近世末期以降）。



右隻第一扇 縦九九・六糎×横六四・八糎

上段〃右・青地に金泥の教典断簡（二四・一
 ×四一・四）、左・和歌短冊（三七・〇×五・
 七）。中段〃右・教典断簡（二七・六×一六・
 八）、左・和歌色紙（西行歌・一九・四×一
 八・一）。下段〃右・奈良絵巻断簡（三一・
 二×三三・二）、左・奈良絵巻断簡（三一・
 二×三五・四）。



第二扇

縦九九・四纏×横六三・二纏。

上段〃右・教典断簡(二六・〇×八・八)、
中・和歌色紙(喜撰法師歌・二三・八×二・
二)左・和歌短冊(三六・八×五・六)。中
段〃左・和歌短冊(三七・一×五・五)、左・
歌集断簡(二四・四×二五・〇)。下段〃右・
奈良絵巻断簡(三一・二×一三・一)、左・
奈良絵巻断簡(三一・二×五〇・八)。

第三扇

縦九九・四纏×横六十三・二纏。

上段〃右・和漢朗詠集色紙(「外物独醒松澗
色」・一七・二×一五・六)、左・和歌色紙
(藤原定家歌・一九・五×一八・〇)。中段〃
右・奈良絵巻断簡(三一・六×四九・八)、
左・和歌短冊(三六・八×五・九)。下段〃
右・奈良絵巻断簡(三一・四×四七・〇)、
左・奈良絵巻断簡(三一・二×一五・九)。



第四扇

縱九九・四纏×横六十三・二纏。

上段〃右・和歌色紙(西行歌・一七・八×一五・八)、中・和漢朗詠集色紙(「可憐九月初三夜」・二〇・〇×一七・〇)、左・和歌短冊(三六・八×五・九)。中段〃奈良繪卷斷簡(三一・六×五一・〇)。下段〃右・奈良繪卷斷簡(三一・二×三一・二)、中・奈良繪卷斷簡(三一・四×二・六)、左・奈良繪卷斷簡(三一・四×二八・〇)。

第五扇

縱九九・四纏×横六十三・二纏。

上段〃右・和歌色紙(二〇・二×一七・〇)、中・和歌短冊(三六・八×五・八)、左・和漢朗詠集色紙(「曉露鹿鳴花始發」・二〇・六×一七・八)。中段〃右・漢詩色紙(二〇・二×一七・〇)、中・和歌短冊(三六・六×五・八)、左・和歌色紙(寂蓮歌・一九・六×一八・一)。下段〃右・奈良繪卷斷簡(三一・二×三・四)、左・奈良繪卷斷簡(三一・二×四〇・六)。





第六扇 縦九九・六糎×横六四・八糎。

上段〓 右・和歌短冊(三六・八×五・八)、
 左・和歌色紙(一九・八×一七・三)。
 中段〓 右・和歌短冊(三六・八×五・八)、
 中・漢詩色紙(二〇・〇×一七・〇)、
 左・漢詩短冊(三六・八×五・八)。下段〓
 右・奈良絵巻断簡(三一・〇×一〇・〇)、
 左・奈良絵巻断簡(三一・〇×四八・五)。

左隻第一扇 縦九九・六糎×横六四・八糎。

上段〓 右・和歌短冊(三六・八×六・〇)、
 左・漢詩色紙(二一・二×一八・〇)。
 中段〓 右・和歌短冊(「旧井次良兵衛」歌・
 三六・六×六・〇)、中・和漢朗詠集色紙
 (「數行暗淚孤雲外」・二〇・八×一八・二)、
 左・和歌短冊(三六・二×五・五)。下段〓
 右・奈良絵巻断簡(三一・六×一八・二)、
 左・奈良絵巻断簡(三一・四×四〇・六)。



第二扇

縦九九・四纏×横六十三・二纏。

上段〃右・和歌短冊(三六・六×五・八)中・歌集断簡(二〇・四×三・六)、左・和歌短冊(「倉橋刑部卿泰行」歌・三六・六×五・八)。中段〃右・和歌色紙(二〇・〇×二七・一)、左・和歌短冊(三六・六×六・〇)。下段〃右・奈良絵巻断簡(三一・二×八・六)、中・奈良絵巻断簡(三一・二×五〇・六)、左・奈良絵巻断簡(三一・二×三・六)。

第三扇

縦九九・四纏×横六十三・二纏。

上段〃右・漢詩色紙(二〇・二×二七・〇)、左・漢詩色紙(二〇・二×二七・一)。中段〃右・奈良絵巻詞書断簡(三一・六×四一・〇)、左・和歌短冊(三六・八×六・〇)。下段〃右・奈良絵巻断簡(三一・二×四五・八)、左・奈良絵巻断簡(三一・〇×二七・二)。



第五扇

縦九九・四纏×横六十三・二纏。

上段〃右・和歌短冊（三六・〇×五・九）、
左・和歌扇面（縦二〇・八×上弦五〇・二×
下弦二〇・八）。中段〃右・和歌短冊（三六・
二×五・九）、中・和歌・絹本（在原業平歌・
素性歌・二〇・〇×三・二）、左・和歌短
冊（三五・六×五・九）。下段〃右・奈良絵
巻断簡（三一・四×二・二）、左・奈良絵
巻断簡（三一・二×四一・六）。



第四扇

縦九九・四纏×横六十三・二纏。

上段〃和歌色紙（一九・〇×一七・八）、左・
和歌色紙（二〇・二×一七・〇）。
中段〃右・和歌短冊（三七・二×六・〇）、
左・奈良絵巻断簡（三一・六×四九・八）。
下段〃右・奈良絵巻断簡（三一・〇×二・
八）、左・奈良絵巻断簡（三一・二×三〇・
〇）。



第六扇 縦九九・六糎×横六四・八糎。

上段〃右・教典断簡(三一・二×四・七)、
 左・青地に金泥の教典断簡(三一・六×二〇・
 五)。中段〃右・和歌短冊(三六・四×六・
 〇)、中・和歌色紙(二〇・六×一八・四)、
 左・和歌色紙(二〇・四×一七・〇)。下段〃
 右・奈良絵巻断簡(三一・二×九・四)、左・
 奈良絵巻断簡(三一・二×四九・二)。

伝来・不明。現住職渡部恵光師によれば、住職就任時に既に宝物資料館に展示してあった、閻魔王宮が描かれていたので入手したのではないかとのこと。

その他・各扇中段・下段の奈良絵巻断簡は、寸法(中段の物は縦三二・六糎。下段の物は縁取りのためやや小さい)や霞を含めた画風から察するに、同一工房で作られたものか。いずれも江戸時代前期・寛文頃(石川透氏分類の^③期)のものか。料紙は鳥の子紙。

全体的に、断簡の内容・及び断簡の大きさによるバランスを考慮しての事であろうが、經典や和歌・和漢朗詠集等の断簡は中段より上、奈良絵巻の断簡は中段より下に貼られている。

經典断簡、和漢朗詠集色紙、古歌短冊・色紙等個々の作成年次に関しては未考であるが、經典断簡を除けばそれ程古いものという印象はない。屏風全体の制作年次に関しては、極札付⁴和歌短冊の作者が目安となる。左隻第一扇中段右の和歌短冊「旧（「旧」カ）井次良兵衛」に関しては未詳であるが、左隻第二扇上段左の和歌短冊「倉橋刑部卿泰行」は近世後期の公家である。倉橋家は安倍氏の一流で慶長期に創立、陰陽道を家職とした。泰行は従三位倉橋有儀の男で、母は前権大納言愛宕通貫の女。安永八（一七七九）年六月一七日生れ、文化六（一八〇九）年三月二日に従三位、最終的には安政五（一八五八）年二月一九日に正二位にまで昇り、翌十二月二〇日に八〇歳で没。家職の陰陽道の他に和歌も能くしたといい、著作に「倉橋二位泰行卿詠草」があるという。刑部卿に任命されたのは、文化九（一八一二）年二月一九日である。⁵左隻第二扇の全体的なバランスを鑑みるにこの短冊が後から貼られたとは考えにくいので、屏風全体の制作年次は文化九（一八一二）年二月一九日以降ということになる。

三、奈良絵巻断簡・場面比定等

続けて前稿にて未紹介の奈良絵巻断簡を、全て紹介する。合計三場面分で、何れも作品名未詳のものである。なおアルファベットは前稿からの続きで割り振った。

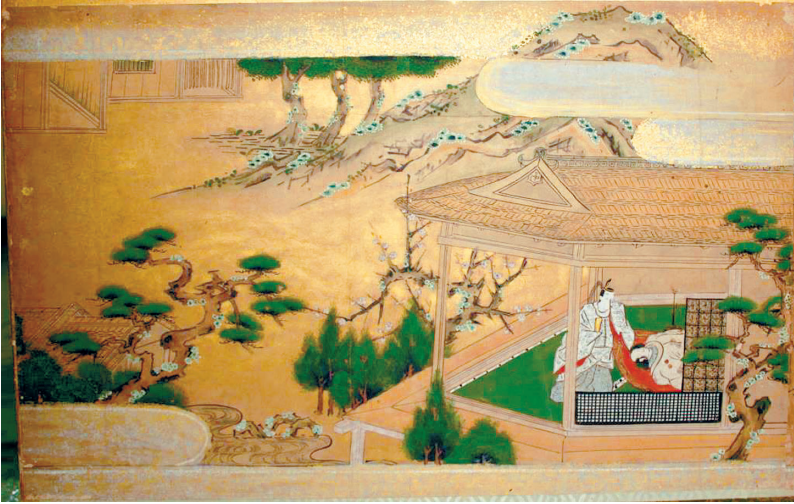


M・右隻第三扇中段

笠を手に持ち腰に鎌らしきものを挿した農民風の男が、貴族の邸内に入る場面が描かれている。或いは『ものくさ太郎』が清水寺で見染めた女房の居所を探り当てた場面であろうか。但し『ものくさ太郎』の同場面の本文は、「紙一かさを竹にはさみ」手に持っていたものとする。⁽⁶⁾



N・右隻第一扇下段左側、右隻第二扇下段右側
 数人の男が小川の傍らで、鋤鉤を使って農作業を行っている。器を持った男は種籾を蒔いているのであるう
 か。牛と共に柴を運ぶ者の姿も描かれる。背景には人
 家や寺院風の建物も見受けられる。



○・右隻第二扇下段左側

粗末な建物の中で臥せる男と、其傍らに直衣姿の貴族の男が描かれる。直衣姿の男は泣いているようにも見える。建物の傍らに咲くのは梅であろうか。

最後に、前稿では紙幅の都合上掲載出来なかった「左隻第三扇中段朝夷名三郎義秀関連絵巻最終段の詞書釈文を掲載し、本稿を閉じたい（平仮名を漢字に改めた箇所にはルビを振った。また適宜濁点・読点を付した。「ノ」は改行）。

其後朝夷名は、本地救世観音と化／現して、寂光土に帰り給ひける、／昔竺の窟の日蔵上人は、蔵王権／現に導かれ、十三日がその間に、／三界六道を見巡りしかども、それは夢／中の事なり、佛にあらざる菩薩にあら／ず、生ながら冥途に赴き、勢ひ、閻／大王にも勝りたる朝夷名が振る舞ひ／こそ不思議なれ、理なるかな、戸隠の／大明神は、本地救世自在王菩薩也、／衆生済度の御方便にて、義秀／と生まれ給ひつゝ、多くの罪人共を、／救ひ取り給ふこそ、有り難けれ、佛の／御利益、区々なりと申せども、観／音の御慈悲は、殊に優れ給ふ、なれば今／この娑婆のさしも草、信ずべし／、

注

(1) 日本歴史地名大系三一『和歌山県の地名』（一九八三年二月 平凡社）の「善名称院」項を、以下に引用する。

善名称院 ⑨九度山町九度山 九度山集落の南部にあり真田庵ともよばれる。高野山真言宗、伽羅陀山と号し、本尊地藏菩薩。真田昌幸・幸村父子が幽居した旧宅を、寛保元年（一七四一）に僧大安が寺としたのに始まると伝える。「続風土記」は土砂堂・大安上人霊屋・蔵屋・鎮守社のあることを記し、この地は「真田安房守昌幸并左衛門尉幸村居宅の地にて土人真田屋敷と呼ぶ、慶長中昌幸死して此地に葬る、宝篋印塔あり、側に幸村の像あり」と記す。現在は八棟造とよばれる城郭を思わせる本堂、真田家の紋である六文銭が刻まれた門、昌幸の宝篋印塔などが残り、真田屋敷跡として県指定史跡。

- (2) 「善名称院蔵朝夷名三郎義秀閑連奈良絵巻断簡について 善名称院蔵・奈良絵巻断簡等貼り混ぜ屏風の紹介(一)」
 (『中京大学文学会論叢』一 二〇一五年三月) による。
- (3) 奈良絵巻制作年代に関しては、石川透氏『入門奈良絵本・絵巻』(二〇一〇年八月 思文閣出版)を参照して判断を行った。

(4) 極印がないので、厳密には作者名注記の紙片とでも言うべきものであろう。

- (5) 市古貞次氏監修『国書人名辞典』二(一九九五年五月 岩波書店)、橋本政宣氏編『公家事典』(二〇一〇年三月 吉川弘文館) による。

(6) 国立国会図書館蔵版本「おたかの本し物くさ太郎」(新編日本古典文学全集『室町物語草子集』 小学館 所収)、上野図書館蔵渋川清右衛門刊記御伽草子板本(日本古典文学大系『御伽草子』 岩波書店 所収) 共に同文である。

追記・貴重な資料の調査・報告をご許可下さった伽羅陀山善名称院に深謝申し上げます。なお図版の量の関係等で、旧稿とは掲載誌が異なることとなった。通読に際し不便をおかけすることをお詫び申し上げます。また旧稿第二節に掲載したJの翻刻の中で、十四行目の「まちくなり」は「まちくなり」の誤りである。ここにお詫びの上、訂正させて頂く。